

104

近世の医家が病家へ向けて著した
教訓書『病家教訓草』(1781)

平尾真智子

順天堂大学医学部 医史学研究室

『病家教訓草』は天明元年(1781)に江戸で著された医家から病家に向けての医療に関する簡便な教訓を内容とする家庭医学書である。江戸期の本格的な看護書は江戸後期天保3年(1832)の平野重誠『病家須知』(全8冊)であるが、それより約半世紀前に病家向けに著された。本書の内容と看護史上の意義について明らかにする。

『病家教訓草』は『国書総目録』によると国立国会図書館と京大富士川文庫に所蔵されている。縦16cmの和装書で本文は50丁である。書中で作者は「病家おしへ草」と記している。構成は扶桑堂田義道による漢文の序文(二丁)、作者幽芳亭主人による序文(二丁)、本文(一丁から三十四丁)、養生誹歌百廿一首(三十五丁から五十丁)である。漢字ひらがな混交文である。扶桑堂による序文は安永庚子(1779)、著者による序文は安永巳亥(1780)、出版は天明元年(1781)である。作者は「幽芳亭主人」で医者であるが本名などは不明である。国立国会図書館の蔵書目録において幽芳亭主人による他の著作は検索できない。富士川游『日本医学史』、服部敏郎『江戸時代医学史の研究』には未記載である。本書に関する先行研究は未見である。

目次は、一 病家心得の事、二 医者を選ぶ事、三 時医名医を用ひましき事、四 医者を尊むべき事、五 薬を用るころろ得の事、六 灸をすゑる心得の事、七 財をおしむあやまちの事、八 巫覡に迷ふ過の事、九 薬人をころさず医者人を殺す事、附養生誹歌百廿一首、となっている。扶桑堂による序では、病の家では病を治する理に暗く、天は法中にあることを知らないでいる。この書は丁寧な教訓の書である、としている。作者の序では、執筆の理由を夢に現れた医祖大己貴命の教えを書き著したものと記している。最初の「病家心得の事」では、病は平常の慎みが軽重を左右すること、病は軽い内に治すこと、良き医者を選定、医療を受ける患者の心得、医者・患者関係、介抱の人の心得を述べている。次に医者に関する項目として、篤実で学問のある医者が良医であり、治に貧富の差をつけないなどの医行為の倫理、命が一番大事であり医は天官に相当する、など3項目を当て重視している。以下の項目では、家での薬の使い方、灸のすえ方、身は財より大切であり、庸医・廉薬は用いないこと、薬をやめ符水を用いて病が重くなる場合があること、他科を併用するときは本道に相談すること、人の生殺は薬を用いる者の方寸にあること、などについて述べている。最後に「養生誹歌」として、病と医療に関する漢字2文字の題とその内容の教訓和歌が121首掲載されている。

『病家教訓草』は医家が病家に向けて医療に関する心得を平易に著した単行の家庭医学書である。この系統の書では、貝原益軒の『養生訓』(1713)は養生を主体とし、加藤謙斎『病家示訓』(1713)は医者選びの心得が中心で、三宅建治『日本居家秘用』(1737)は家の生活全体のなかに保健医療を位置づけた形態となっている。本書の内容は医者からみた病家を知っていて欲しい内容であり、庶民の医療の様子を伺い知ることができる。また資格制度のなかった時代の医者を知る資料でもある。本書には「養生誹歌」という教訓和歌が121首(「百人一首」を意識している)附録で掲載されている。これらの和歌は「道歌」で江戸時代に盛んになった。和歌は日本人の口調に適し、暗誦しやすい。読者の興味を喚起し、医療に関する教訓を覚え易くする。作者は江戸の医者で本名は不明であるが、文芸の心得もあり、同業者を戒める内容もあることから、実名を用いなかったと考えられる。

『病家教訓草』は『病家須知』より約50年早く医家から病家に向けて著された、病を治するための理(看病を含む)を記した平易な教訓書であり、和歌を活用し覚え易くする工夫がなされていた。